第九〇話　盲人の雌蚊捕獲

前項記載の通り其後引續き堀マッサーヂ氏の手術を受けつゝある時或る夜の物語中約二十年前岐阜訓盲院に於て翁の昆蟲談を聞きたる節蚊の雌を捕獲することは今に至るも忘れ居らずとの事である、よく〳〵考ふるに訓盲院長故森卷耳氏には曾て岐阜中學校博物教員時代に懇意なりしを以て特に昆蟲談を依頼された夫れに應じて鳴く蟲に關する標本を持參して訓盲院へ趣き松蟲、鈴蟲、轡蟲、コホロギ等其他各種蟬類の鳴き聲にて其蟲の種類を仮令盲人にても區別の出來得る事などより一々説明の後笑ひ話として盲人に對して暗夜に蚊の雌蟲を捕獲せよとの命令あらば直に實行し得るのである。其方法は若一蚊の來りて刺したる時は手にて擲き殺して差出せば其蟲は必ず雌蟲であります。其蚊は血を吸ふものは雄蟲にあらずして必ず雌蟲なれば百發百中であると面白く話したのであります。其事を約二十年後の今日圖らずも其談を聞き得たのを喜びたのである尤も堀氏は當時生徒にあらずして教員の一人として傍聽して居たとのことである。

第九一話　不幸の數々

第一、明治二十四年の濃尾大震災の不幸

第二、同二十七年日露開戰の際財界變動の爲め銀行破綻等にて大々的の不幸を來しました。

第三、在東京の愚息正　明治三十八年の十二月より流行性腦脊髄膜炎に罹り直に大學病院の青山内科に入院遂に危篤に陷りたるも幸ひ青山博士並に丹羽先生の熱心なる治療により翌年四月末全治退院の出來ましたのは不幸中の幸福でありました。

第四、明治四十年十月二日父死去の爲め研究所の經濟上一大不幸を來しました。

右は重なる不幸を掲げたるも其他輕重種々なる不幸は無數であります。然るに最大不幸とも思ふべきものは昨大正十一年八月下旬翁の發病であります、翁得意の最大不幸を最

大幸福に轉換せんとするの勇氣はあるも最早力の及ばざる事は實に遺憾とする所であります、最近東京方面の有志者中多大の同情ありて慥に當所の前途に光明を認めたるも不幸今回の天災の爲め全く萬事を休する事になりました茲に於て翁も昔の忠臣たる祖先長年公も恐らく其當時は矢盡き刀折れて討死するの外はありませぬ翁も亦目下其場合に立至りました、然し翁は此際神佛の御加護を蒙りて一日も永く餘命を保ち出來得る限り善後策を講ずるの覺悟であれば世の同情者諸君宜しく御助勢あらんことを請ふ次第であります。（大正十二年九月十日記）

第九二話　宮島觀音寄附の假床

翁の住宅即ち神佛學校は世間並の床の間は全くなければ岐阜市勒屋町の篤志家宮島助三郎御觀音樣には其實況を見て直に表具師に命じて假床を作りて寄贈されしを以て翁は喜びて軸物を掛け其他夫々準備の結果愈々記念の欄間も出來たるとなれば茲に始めて撮影をしたのであります。次に示したる圖に就て說明せば中央の縱額は申すまでもなく東鄕元帥閣下靈筆の「至誠通天」の文字で右方の掛軸は明瞭ならざるも源義家の馬上にて櫻花を眺めつゝ勿來の關通過の實況を堀氏親族たる堀曉中畫伯の畫きたるものにて彼の熱心なるマッサーヂ堀宇三郎氏の寄贈で又右方の掛軸は六臂如意輪觀世音菩薩は數百年前の古畫で當市帛盤町の信仰家大洞彌兵衛氏の寄贈品であります。尙又縱額の前面にある置物の最下部にある圓柱は和歌山縣海草郡長保寺仁王門（室町時代）に使用の家白蟻被害松材にして其上にある板は奈良縣唐招提寺の建物に使用の

第三十二圖

假床全景の圖

支輪と申す一枚板であります。尚其上に四種の特別記念とすべき珍奇の蟻害櫻樹四種を以て組立てたる四櫻である其詳細なる記事は昆蟲世界白蟻雜話（第一二四一）（白蟻と觀音）（四〇）（第廿五卷第百八十四號大正十年四月發行）と題する一項參照ありたし。然るに床前左方にある南洋クインスランド木曜島產の一種白蟻の塔にて一見白衣觀音に能く似たるを以て白蟻の作りたる眞の白蟻觀音と稱して居ります。又右方は全快（全貝）石と申しまして已に昆蟲世界白蟻翁雜話の第四三に於て挿圖の上に詳細記したのであります。尚又欄間に用ひし一枚の板は彼の奈良縣唐招提寺蟻害の古材にて白蟻觀音六角堂の床板に用ひたるものゝ殘りを使用致しました。然るに其板に三個の櫻花を陰陽に彫りて左右位置能く六個を現したるは恰も昆蟲の左右にある三足づゝ併せて六足あるに同じ。其三個の櫻花第一は尤も記念となすべき故原敬御觀音樣三つ櫻の紋章（盛岡市大慈寺の住職山本悟岳師に其紋章を依賴し置きたるに其後墓前の大石材香爐に現はされたる紋章を特に石摺として惠送せられたる尤も珍らしきもの）第二は別格官幣社名和神社（鳥取縣西伯郡名和村）に使用の櫻花。第三は願成寺（岐阜縣稻葉郡芥見村）にて使用さるゝ所の中將姫手植の誓願櫻であります。然るに該欄間調製を始めし日は大正十二年四月十五日彫刻師辻壽山氏以上の三櫻花を探し出したるものなれば極めて不備の點あるも幸ひ防蟻に熱心にして且つ美術思想に深き熊本縣土木技手志賀市平氏參り居られたるを以て辻氏と相談中同氏より種々助言を得て櫻花の配置も能くなれり。尚且蟻害材を以て板の左右並に上部三寸三分の隙に二本を使用することの注意をも與へられしを以て其後種々病床にて使用材を考へたるも不幸にして心當りもなく閉口中同年六月一日早朝辻氏參られ只今より欄間を取付ける由とのことなれは狼狽の上俄に考へたるは曾て大阪府濱寺公園の木橋に使用の細き赤松丸太材を家白蟻の爲め白太は悉く蝕盡して僅かに赤身の殘り居るものを貰ひ來りて保存し居ることを思ひ出して取り出して直に使用したるに極めて面白く出來得たのは全く志賀御觀音樣の賜物であることを信ずるのである。茲に同情諸君に對して深く謝する所であります。

眞床のなきをあわれみ假床を
作りてくれし人は觀音
假の世に假床出來て喜ぶも
飾りたつれば極樂となる
飾りたる六種のものは自づから
六の因緣結ばれて居る
六の字は南無阿彌陀佛六足蟲
六觀音となるは不可思議

第九三話　人眞似嫌ひ

長所を取り短所を補ふことは人間として常々心掛けねばならぬことであります、故に翁も常に善き事なれば喜びて眞似を致して居ります、然し翁の本來としては、特別の善

事は兎に角、人眞似好きにあらずして人眞似嫌でありまして、特に人の糟粕を舐むることは好まぬ性質なれば何事にても人の行はざる事即ち獨創的の事が行ひたいのであります、然し是れと云ふ獨創的事業も發明出來ず、相變らず苦しみて其日を暮して居ります、人眞似の上手な人は即ち世渡り上手であつて何事も早く立廻りて常に幸福であるが獨創的の人は眞面目な所謂眞の世渡りをせやう何事か國家に貢献せやうとする人であつて從つて經濟に不利の位置に立つ事が多いのであります、然しこの獨創的事業は自分のみ獨創と考られ又眞に獨創であつてもそれが國家の幸福となり利益とならざれば全く駄目であります。翁は性來の負け嫌も手傳ひて獨創的のことを好み人眞似即ち糟粕舐むる事は大の嫌であります。國民特に目下の青年諸子の如きは何事に依らず徒らに人後を追ふことなく獨創的の事に着眼せられんことを望むのであります。然るに現今の大勢を觀るに兎角獨創的人物の少くして模倣的人物の多きを見る度に國家を亡ぼすものは敵國にあらずして自國民である樣に考へられます。

人眞似の上手な人は幸福で
獨創的は不幸勝なり

右の次第にて翁も至つて人眞似嫌ひの爲め自然獨創的に近きものを始めたので決して自慢の出來得る樣のものではありませぬが今左に獨創に近きものと信ずるもの五、六を列擧致します。

第一、昆蟲研究所新設の事、
第二、昆蟲館、昆蟲博物館等新設の事、
第三、昆蟲に關する特別の講習會を開き始めし事、
第四、昆蟲展覽會又は品評會等を開きし事、
第五、蝶蟻鱗紛轉寫法を發明せし事、
第六、九十帝陵を約十四、五日間にて巡拜せし事、
第七、千社寺詣をして千体觀音を作りし事、

以上掲げたるものは昆蟲に關係あるものゝ内重なるものであつてその以外に於けるものには隨分多數ある樣に考へられますがここには略して置きます。

人眞似は嫌ひ／＼と言ふ内に
獨創事業湧き出づるなり

第九四話　蠶は國の忠臣

蠶は昆蟲の内にても最大なる有効蟲に屬して口より吐く所の絹糸は如何に國家を益せしか吾が國維新以來外國貿易上毎年の輸出額は殆んど第一位を占め輸出入の平均を保たしむるには最大の力を有して居るものと深く信じます。若し一蠶即絹糸なきものとせは維新以來外國貿易上如何に不平均を生せしや實に寒心の至りであります。蠶兒の小口より微細の絹糸を吐き出す力の大にして且つ其强きことは驚くべきものであります。吾國永年間經濟を維持し來りたる蠶兒の勳功は何ものの是に比するものなき樣に思はれま

す。其蠶兒は翁の研究せし昆蟲の一種なれども翁は分業發達のため有効蟲たる蠶兒の事は全く他の專門家即養蠶家に讓りおきて翁は其蠶兒の食物なる桑樹を害する蟲類を如何にして經濟的に防除すべきかの方法に對し全力を擧げて研究致しました。是即ち間接に蠶兒を愛護せば自ら其結果は國家の富を增したる次第であります。兎も角蠶兒は吾が國に對する最大勳功のある昆蟲であることは世人の許す所であります。吾れ〳〵は蠶兒を見習ひて國家に盡さねばなりませぬ。

お蠶の口より出す細き糸
　御國の爲めに盡す蟲心（忠臣）
お蠶の吐き出す糸の其強さ
　外國よりお金引き寄す
昔より一寸の蟲にも五分の魂ありと
　六尺男子魂の長さは
蟲けらに劣る樣なる者なれば
　蠶兒見習ひはげめ人々
蟲けらと誰も輕蔑するなれども
　蠶は國の大の忠臣
蠶をは粗末にするとおのづから
　自分と共に國の損害
お蠶樣と大切にする人なれば
　蟲供養もおのづからする。

右の次第にて本年尋常五年生の翁の愚孫文子には受持先生より數十頭の稚蠶を貰ひ來りて、毎日桑葉を與へて飼育なし遂に小形の籠二個に上簇せしめて立派なる黃金色の繭を得て非常に喜びました。其内一籠は學校へ持ち行き先生に返しました處が蠶を飼育中日々の發育狀態並に眠起より脫皮等の狀態につき幼兒ながらの觀察をして事の意外なる

に驚きました。斯の如く幼兒の内に養蠶の事を一通り知得たる事の將來に及ぼす幸福の影響は甚だ多大なるは謂ふまでもないことで當時の敎育の進歩し居るに驚きました。

五年生御蠶樣を飼ひたてゝ

徹底的に蟲心(忠臣)を知る。

第九五話　收穫皆無の稻刈

明治三十年浮塵子發生に際し翁は毎日の樣に出張して、岐阜を中心に二三里の間に於て浮塵子驅除法を指導して夕方歸宅することにして居ました。

大發生の稻田に行き捕蟲網を以て掬つて見ると一掬能く一つかみ以上の浮塵子が捕れるので大いに効力のある事を認めました。それで捕へたものは皆肥桶に水を入れ油を滴したものゝ中に投入して殺したのですが、かうして一日掬ふと一荷位は捕れたのです。其時使つたのが咽喉付捕蟲網で當時翁の考案になつたものでした。茲に於て翁は比較試驗の必要が起つたから誰か一反歩提供して呉れぬかと地主に連りに相談して見たが仲々まとまりません。地主連は協議の結果石油や蟲網等を小作人に提供して驅除をさせる事になりました。然るに此の時或地主が此の話を聞いて「何天災だから放つて置いても良い。氣候に出て氣候になくなるのだから、いくら名和さんが言ふ事だとて駄目だ。」とたかをくくり、「米が取れなければ年貢を取らぬまでだから。」等と一向に平氣に構へて居りました。其れで其處の小作人は遂に浮塵子の驅除をしない事に決め數町歩に渉つて一つも手をかけなかつたのであります。そうなると其の後が面白い。「どゝもやつぱり捕らねば駄目だなあ。」とは一般の定評で、驅除した所は相當な米が出來て一村に一萬圓餘の損害を免れたのですが、行はなかつた先の土地では、只穗が出た切りになつて實際慘めな有樣でありました。

此事が評判になつて隣村からは大勢見物に行く。年貢は取れぬ。もう某地主も餘程氣の毒になつたと見え大勢の人夫を雇つて刈り倒した。其の事を翁に知らせた者があつて

見に來て呉れと言ふから行きました。氣の毒にも思つたが良い所だと考へて刈つて居る場面を寫眞に撮りました。今此に圖示しやうと捜がしましたが見付からないから殘念です。其時被害の稻を多く持ち歸つて標本にして人々に示して居ましたが、皆に欲しがられて大分別ち且又農商務省の人迄も請はれたので切角の標本も無くして了つた樣なわけです。

斯樣にして遇然にも大面積に渉つての試驗が出來たので翁は愈々害蟲驅除の必要を痛切に感じたのであります。(大正十二年九月十二日、白蟻翁口授、柳原技手筆記)

第九六話　辭世と全快祝

昨年八月發病當時から何んとなく死ぬ樣な氣がした時日の經過と共に段々惡くなつて終には主治醫も今夜は六ヶ敷いとまで謂はれた位であつたから、翁も今回は死を決し、最早再生の見込もないものと思つたので左の辭世を永遠に殘し置かんとて之を世に發表した。

顧みれば六十路餘りは夢なりき
　死後の永きに生きんとぞ思ふ。

六六の間に作る置土產
　殘りしものは罪ばかりなり。

然し夫れと同時に萬一にも餘命を保ち得たらんにはとも考へ幸ひに全快せば何か記念品を翁の病中御心配に預つた方々にお分ちしたいと思ひ、考へついたのが即觀音樣であります。

此合掌觀音は最初百軀を彫刻せしめたが其後追加に亦追加と謂ふ譯にて結局三百三十軀に及んだ之で三十三觀音の全く十倍の數に登りました。斯の如き有樣で記念の爲め保存しておいた法隆寺及び唐招提寺の貴重なる古材も終に全く無くなつたのであります。

右の樣な次第であるから、若し不幸にして翁が死したる時は葬式を出來得る限り質素

にすること若一所葬と言ふ事が起つたならば遺族は之を斷ること然しそれとも所葬をするといふ場合には條件を附すること、それは名和家で執行するよりも質素にして貰ふことである。而して研究所は未だ基礎が確立して居ないから若一香典として知己友人等より受けたるものは必ず悉く研究所の基本金に加へて貰ふこと、亦諸方に行はるゝ告別式は自分が多年苦心して集めたる數十萬の昆蟲標本に先以て告別がしたいから必ず寢棺に入れて、そして記念昆蟲館の白蟻觀音堂の左り手に置いて貰ひ昆蟲に告別がしたい。而して告別の意のある方には六時間即午前十時より午后四時迄の間に於てして貰ひ度いそれから四時が來ると同時に昆蟲碑の前に置き讀經して貰つて濟んだら道順として博物館の前を南に出で遺族の住んで居る前の道を西に行南に向ひ大佛堂裏を通つて火葬場に行くことにして貰ひ度いとの遺言をしたのであります。

第九七話　昆蟲館と六觀音

明治三十九年の事なりき、某有志者來りて東京淺草公園内に通俗敎育昆蟲館を建設する計劃の相談もあれば翁も大いに贊成の意を表したる結果大いに盡力しました。翌四十年より活動を始め先づ東京市役所の許可を得るが第一にて次に場所指定等幾多手續の困難ありしとは勿論なるに最初建築場所撰定の際には公園掛りは素より時の市參事會員等數多の立會にて彼所此所との候補地を指定さるゝも翁の心中には初より有名なる阪東第十三番金龍山淺草寺(本尊聖觀音)に比較的接近したる水族館の西隣の地を擇み居たるに果して其通りに定まりたるは偏に御觀音樣の妙智力なることを喜びました。最早場所の決定と同時にバラック建のものを作りて兎も角昆蟲の標本並に昆蟲に關する各種のものを陳列して漸く開館せしも觀覽者少く結局維持も困難なれば百方手を盡せしも第六區の如く人の來らざれば愈々困難を極め看守人として女子一名なれば萬止を得ず翁は荊妻を招きて館内に看守女と三名棲み居たのであります。斯くすること約半ケ年なるも到底前途の見込なければ代人に託して飯宅しました、其間數年の内には弊害百出不利又不利の事

第三十三圖

淺草昆蟲館の圖

のみ起りて利する所は一點もなきには驚きました、然るに最初より翁は館長の名義を有するを以て責任は悉く翁の頭に來りて何共致方なし。何分東京市役所にては翁の名義の許に特に許可せられて地上權を與へられたなれば翁の名義を取れば直ちに地上權を失ふ次第なれば出金者は中々承知せざれば容易に名義取消も出來ず直接間接の損害を幾多受けつゝ維持して來る內茲に始めて不思議なる同情者の現れたるのであります。其の人は昆蟲館附近に住居せらるゝ所の極めて義俠心に富める松根末吉と申す觀音樣にて相當の出金をして昆蟲館を引受け呉れました其金員を最初の出金者に分配して漸く解決出來まして安心をしました。其際翁も幾分の分配を得ましたが直に其金額全部を研究所の基本金中に寄附して置きました。夫より松根觀音は館の發展に苦心中不幸にして逝去されました未亡人幸子觀音殘りて寧ろ昆蟲館を迷惑され居る際茲に不可思議にも有名なる喜劇の大家曾我廼家五九郎事武智故平御觀音樣の出現ありて松根幸子觀音を助けられました此の武智觀音樣は餘程御觀音樣に因緣の深き人なるや淺草第六區の觀音劇場は誰の經

營の許に營業せしも損害又損害せしも武智觀音經營後の觀音劇場は毎日大入の全盛を極めて居らるゝことは同氏の熱心は申すまでもなけれ共御觀音樣の御加護の力も多大なることと深く信じて居ります。然るに昆蟲館は松根觀音より武智觀音に移り夫より茲に人格者小泉丑松觀音其他中村米本二觀音の手に護られ愈々大々的發展の計劃も出來昨年末迄に鐵筋コンクリートにて間口七間奥行九間二階建の昆蟲館(挿圖の如き)は立派に落成して本年一月一日より開館せられ一般人に觀覽せしむる事になりました。茲に於て十八年目始めて翁の最初の目的を漸く達し得る樣になりました。何事をするも一時に成功するものでなく永く且つ困難を極めたる後の事であります。然し出金者に迷惑を此上懸けては濟まぬと自腹を切りて納税までしても維持したのであります。實に其時代を三期に別つと信長、秀吉並に家康公の樣なる心持が致します。

第一期　鳴かざれば殺してしまへ時鳥　(信長)　廢館期

第二期　鳴かざれば鳴して見せよう時鳥　(秀吉)　活動期

第三期　鳴かざれば鳴く迄待たう時鳥　(家康)　成功期

右の如き時代は翁にありましたが幸ひ御觀音樣の御加護にて今日の昆蟲館あるを得まして喜ぶのであります。果して然らば淺草の御觀音樣は素より松根夫婦、武智、小泉、中村・米本の御觀音樣に對して深大なる感謝の意を表する次第であります。昆蟲館萬歲萬々歲を稱へて昆蟲館今後の發展と同時に六御觀音樣の幸福を祈る所であります。

淺草の御觀音樣の御惠みで
昆蟲の館も助けられたり
六足の蟲の館は不思議にも
六觀音の御力で出來

信長も秀吉時代通り過ぎ
家康公となるぞうれしき
廢館と活動期も過ぎ去りて
成功時期となるぞうれしき
初めより目的達すそれまでに
十と八つの年を經にけり
十八は觀音樣の御命日
菩薩の力如何に尊し
艱難と辛苦の爲に自づから
尊ぶとき修養得しぞうれしき
淺草の觀音樣の御加護にて
昆蟲館も無事に助かる

（大正十二年九月二日記）

第九八話　最後の講習

我が名和昆蟲研究所主催の全國害蟲驅除講習會は大正十二年八月五日第三十六回の齡を以て開會例に依つて二週間即ち同月十八日を以て無事終了しました、翁は昨年八月發病以來再び起つ能はざる身となり敎場に臨むことが出來ないので止むを得ず毎日九十度以上高温の病室（明治五年小學校令發布の際模範小學校として建てられた約五十年前の古き建物であります）に諸生を招き約一時間許り宛の講話をなしたるのみならず、夜間は有志者を招き座談的に勝手なることを話したることは實に絶對愉快のことでありました、熱心なる諸君は能く辛棒されたることを深く喜びました、翁は是れまで幾度か揮毫を乞はれたことはありますが未だ曾て執筆したことはないにも拘らず、講習員諸生の熱心に感じて遂に諸君の希望に應じ扇子等に一文字又は二文字位宛書かして頂きました、目下六十七才の翁には始めての手習で恐らくは翁執筆の始めにして終りならんと信ずる

のであります。斯くの如き高温中にも最善努力を以て講話をなしたる大目的は平和に於ける忠臣卽ち役に立つ人又は眞面目の人を一人にても多く作ること卽ちふやしたいのが翁の平素の考へでありまして講習生一人は少くとも百人位又は千人位と認めて話をいたして居りましたが本年は命まで賭しての講話なれば少くとも一騎當萬と心得て居りました。

命まで賭して講話をなしたるは
平和の忠臣ふやす爲めなり

右の歌を短冊に認め各自に別ちました。

百度にも近き暑さにお話の出來得しは
神と佛の御加護なるらん

右の如き次第でこの講習會はこの研究所の續く限り續けねばならないのですが翁としては本年が最後であることと信ずるのであります。（大正十二年九月五日記）

第九九話　續話

白話も早や題を重ぬること九八に至つたけれ共容易に話の種は盡きない、一寸考へても最早三十三話位いは集るのですが話數に於て先の約束もあり紙數に於ても制限があれば約の如く第九十九話を以て筆を止めます、滿題の爲め本編に載せられないものが一寸考へても左の通りであります。

一、雪中より浮塵子を堀り出したる有益なる話
一、蟲害豫報を行ふたる話
一、害蟲驅除には袴、劍、筆、鞭、珠數の五器必要の話
一、益蟲驅除をなし害蟲保護をなしたる話
一、害蟲と思ひ益蟲を悉く殺したる滑稽なる話
一、昆蟲界の迷信より起る種々なる不幸の話

一、大器晩成の話
一、甘薯の晝食の話
一、車中宿泊の話

斯樣な風で擧げ來れば全く限りがありません是等は毎月發行の昆蟲世界白蟻翁雜話の欄に順を追ふて掲載しますから何卒御高覽の榮を得たいのであります。

九十九話出來て尙又三三話

續きて出來得るものと信ず

昆蟲翁白話終

昆蟲翁白話奥附

定價金壹圓五拾錢

大正十三年一月二十日印刷
大正十三年一月廿五日發行

發行所　岐阜市公園　名和昆蟲工藝部

編輯者　岐阜市大宮町二丁目十八番地　名和靖

印刷者　岐阜縣大垣市郭町一五三番戸　西濃印刷株式會社代表者　河田貞次郎

印刷所　岐阜縣大垣市郭町一五三番戸　西濃印刷株式會社

514
197

終